

## 大阪市立大学 商学部

訪問調査対象 プログラム名	オーストラリア・メルボルン大学認定ホーソン語学学校での語学研修およびメルボルン大学学生とのペアリングプロジェクト
類 型	語学習得型×選択型

### A. 海外プログラムの詳細

#### 【要旨】

- 語学研修だけにとどまらず、現地学生との相互学修や調査を通じて、現地の社会や文化への理解を深めさせ実践力の涵養も狙いとしている。
- 奨学金の充実を図り学生が海外プログラムに参加しやすい環境を整えてきた。
- 本海外プログラムへの参加をきっかけに、研究型プログラムや長期留学への誘導を図っている。

#### 1. 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

##### 海外プログラム個別の教育目標が明確である

同大学商学部のディプロマポリシーは以下の通りである。

経営学・商学・会計学に関する基礎的知識から専門的知識まで体系的に修得することで、現代の企業や社会に直面する多様な課題や問題を自ら発見、分析、解決する能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生に、卒業を認定します。

ここにある「現代の企業や社会に直面する多様な課題や問題を自ら発見、分析、解決する能力」を身につけるためには、理論と実践の両輪を意識した教育を施す必要があると考えている。グローバル化が進展する日本の経済や社会を前提に考えれば、日本国内での学修だけで実践的スキルを身につけさせるには無理がある。例えば工場見学しようにも多くのメーカーは生産の比重を海外に移しつつあるため、それらの全容の実際を学生に見聞させることは難しい。大学としては、生産のみならず事業全体として企業が海外でいかなる展開をしているのかということ、学生に見聞させたいと考えている。

当プログラムは語学研修を主としたプログラムであるが、せっかく海外に派遣するので、現地の社会保障、教育制度、女性の活躍する社会やそのサポート、子供の補助、NPO など、特に欧米の先進的な制度や社会についても学修させられるプログラムを目指している。そこで共同研究も行なっているメルボルン大学で、語学研修や現地学生との活動を主としたプログラムを開設した。また、まずは語学レベルの向上を第一とし、その上で次の長期留学に繋がればとも考えている。なお日本学生支援機構に示した本プログラムの教育目標は以下の通りである。

- 欧米の視点からアジアビジネスを見たとき、どのように見えるのかを把握する。

- 文化が違う人々とのコミュニケーションによって課題抽出を行うプロセスの有り様を、体験から獲得する。
- コミュニケーションに必要となる実効性のある語学能力を、ペアリングによって獲得する。

## 2. 海外プログラムの実施状況とその内容

**教養や英語スキルの修得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている**

【実施時期】夏期（8月）と春期（3月）の年2回

【実施期間】夏期（8月）と春期（3月）のいずれも約5週間

【実施場所】メルボルン大学認定ホーソン語学学校（オーストラリア）

【参加学生数】2017年度24名、2018年度22名（いずれの年度も夏期と春期の参加者合計）

【プログラムの具体的活動内容】

本プログラムは、語学研修、メルボルン大学学生とペアを組み両国に関わる課題についてテーマを設定して議論、関係組織への視察などで構成される。

現地での学生の活動は、午前中はメルボルン大学認定ホーソン語学学校で英語の授業を受け、午後はペアリングプログラムで学ぶことになっている。

英語授業は語学学校の既存プログラムに参加するもので、最初に文法のテストと面接により、英語の能力に応じてアドバンストクラス（1クラス）とインターミディウム（2クラス）の3クラスに分けられる。クラス分け後、学生は各々、英語の学修コンテンツをジェネラル、ビジネス、アカデミックの中から選択して学修する。こうした形でプログラムに参加することで、特定のクラスに日本人ばかりが集まってしまうことを避けることができる。

午後のペアリングプログラムでは、メルボルン大学で日本語を学んでいる学生とペアになり、相互に自分の母語を教えあいながら課題に取り組むという仕掛けになっている。そのため、学生に本プログラムに参加する前に日本語の教育方法を学修しておくように伝えているが、特に特定の科目を履修するよう指導しているわけではない。また、授業の回によっては、メルボルン大学内の見学や大学近郊へのツアーを組んで出かけるということもある。ペアリングについては、2017年度と2018年度の3月はうまく運営できたが、2018年度8月についてはメルボルン大学生の休暇期間と重なってしまい、うまくいかなかった。ペアリングの仕方は、学生に予め興味のあるテーマ、例えば日本とオーストラリアの交流、カフェ文化などを申告させ、それをメルボルン大学側で関心が共通する学生とマッチングさせている。しかし、毎回、両者の関心がなかなか重ならず苦勞することが多い。ペアリングプログラムの活動では、ペアの中で課題を設定して互いに協力して思考し調査してレポートを仕上げる。学生はレポートを語学学校の担当教員に提出しフィードバックを受ける。またこれについては、帰国後、出来るだけ商学部の教員からもフィードバックをするようにしている。

### 3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

本プログラムは、「ビジネスコミュニケーション」という2・3年次の基礎科目の一部としているが、語学研修と同様に位置付けてきたので、渡航前の事前学習や事後学習は行なっていない。

しかし、学生たちの英語力をもう少し向上させた上で渡航させた方が、学生の現地での学びが深まるのではないかと検討し、2020年3月渡航のプログラムより、事前学習として3日間終日の英語研修を受講させたり、本プログラムに参加する目標設定をさせたりすることを計画している。

### 4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

#### 海外プログラムの成果を評価する何らかの仕組みがある

渡航前と渡航後に、TOEICとビジネスで使える英語力を測定するVERSANTとを学生に受検させている。渡航前後でのTOEICスコアの伸びは、昨年度までの平均で約80、事前学習を充実させる今年度については200向上させ、参加者のスコアが800-900というレベルまで引き上げられればと期待している。

また学生には帰国後、自由記述型のアンケート調査を実施し、プログラムの改善に活かしている。

### 5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

学生が積極的に参加できるよう本プログラムを「ビジネスコミュニケーション」という2・3年次の基礎科目の一部として単位化した。現時点では商学部の取り組みであるが、いずれは全学的な取り組みにしたいと考えている。

商学部の1学年の43%がJASSOの支援を受けられるようになった。またJASSOによる支援だけでなく、大阪市立大学夢基金という同窓会からの奨学金も用意しており、資金面では学生にとって参加しやすい環境が整っている。

### 6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

プログラムへの参加者のうち、交換留学などの長期留学への近年の参加者数は、年間2～3人である。また、本プログラムへの参加者には、商学部で進めているタマサート大学（タイ）との交流プログラムへの参加するよう促している。この交流プログラムは、パナソニック、クボタ、ダイキンなどのタイに進出している日系企業とも連携した内容となっており、取り組むテーマは研究プログラムに近い。ある程度の英語力を身につけた学生には、是非この交流プログラムで研究とも融合した活動に参加してほしいと考えている。

## Ⅱ. 学生インタビュー

### 1. 大阪市立大学学生 1 (商学部商学科 3 年)

#### (1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

高校生の時、中国の高校生をホームステイとして受け入れ、登校も共にした。その中国の高校生とは英語で会話をしたが、翻訳機を利用しての会話であった。それでも、何から話していいのかわからず、思ったこともうまく伝えることができなかった。この経験から、学校で学ぶ英語と実生活の会話で使う英語は異なるものだと知り、このままではいけないと英語の学習に注力するようになった。そして英語の力をつけ、大学に入学して機会があれば海外留学をしてみたいと思うようになった。

#### (2) 参加した海外プログラム

2 年次春季休業期に 5 週間を使って実施される「メルボルン語学留学」に参加することにした。この海外プログラムに参加するにあたっては、①派遣先がオーストラリアのメルボルンで治安も良いことから海外に行ったことのない自分でも安心して行けそうということ、②単に現地の語学学校に通って英語を学ぶだけでなく、現地の学生とペアを組んで活動する場面もあるので英語を実践的に使える場面がありそうであったこと、③派遣期間が長期ではなく 5 週間と頑張れそうな期間であったことが決め手となった。参加するにあたっては、初めての海外で日本では経験できない異文化体験をしたいと考えていた。

現地での基本的な生活パターンは、午前中から 13 時までメルボルン大学に附属する語学学校で英語を学修した。午後は自由に過ごせる時間として有意義に活用した。メルボルンの中心街や海に出かけて現地についての見聞を広めたり、語学学校で知り合った同じく海外から来た他国の友人やペアの現地の学生たちと、メルボルンらしいカフェで会話を楽しんだり、夜の食事を共にしたり、時には宿題について相談したりし、そうした中で、オーストラリアだけではなく他国の文化についても見識を広めることができた。現地の学生との交流としては、語学研修でのペアとの会話のほか、メルボルン大学の日本語を学修するクラスに参加して、現地の学生と日本語で会話をするというのもあった。

#### (3) 事前・事後学習について

取り立てて事前学習および事後学習はなかった。事前学習としては、参加者が一度集まって、渡航、現地での学修や生活に関する庶務事項の伝達を受けるといったものであった。事後学習は参加者アンケートに回答するというものであった。

本海外プログラムと学内のカリキュラムとの関連性はあまり感じられなかった。また商学部と経済学部を対象としたプログラムであったが、専門分野にかかわる活動も特になかった。

#### (4) 成長を感じる点

外国人の学生とのコミュニケーションを通し、異文化対応力が少しはついたように思う。

最初に語学学校へ行った時、サウジアラビアから来た学生やドレッドヘアをした学生を見て怖そうだと感じた。しかし彼らと授業の中でペアになって学修する機会があり、そうした学生が理解の進まない箇所について優しく教えてくれた。結果、彼らとは少しずつコミュニケーションがとれるようになり、自分が帰国する際には寂しいと言われ、大変嬉しく感じた。

また渡航前に比べて語学力が向上したことを実感している。自分の意見を発信することについては実力不足な点はあるが、渡航前に比べて英語で話されていることがだいぶ聞き取れるようになった。語学学校に参加している学生には中東や東アジアなどさまざまな出身国の学生がいて、出身国によって英語の発音の仕方も微妙に異なったりするが、そうした違いも聞き取れるようになった。帰国後、自分がアルバイトをする飲食店にやって来る中国や韓国のお客さんが話す英語が聞き取れるようになっていた。

#### **(5) 満足・不満足な点**

満足している点は、日本にいただけでは体験できない異文化体験ができたことであり、また現地での滞在が5週間という設定も自分にはちょうど良かったと感じている。

不満足な点は、海外プログラムに関する重要な連絡が派遣直前で混乱したことと、渡航当日、教員は帯同せず自分たちで現地赶赴しなければならなかったことである。また現地でのペアリングの仕方についての伝達やスケジュールについても、場当たりの急に伝えられたことについても不満がある。

#### **(6) 今後の学修**

5週間の海外プログラムに参加したことで、海外渡航に対する心理的ハードルが下がり、海外に赴くことを積極的に考えられるマインドを持つことができた。こうしたことから、3年次後期には9日間の海外プログラム「インドネシア研修」に参加した。この研修では、特定の企業に赴いて課題を抽出し、その改善策を提案することに取り組んだ。この経験から、顧客の不満、企業の従業員の不満などのデータから課題を抽出し問題解決をするようなことへの関心が高まった。結果として今後マネジメントについての学修を深めていきたいと考えている。

本音を言えば1年間、海外の大学に留学してみたいという気持ちはあるが、金銭的に厳しいということと、自分自身は一浪をして大学に進学したということとを踏まえ、それは難しいことであると考えている。将来は、商社など海外の企業との接点を持てるような仕事に就きたい。

## 2. 大阪市立大学学生2（商学部4年）

### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

入学前の海外体験、異文化体験はほとんどない。入学したら、海外プログラムにできることなら参加したいと考えていた。

### （2）参加した海外プログラム

入学後「参加したい」という気持ちが強くなったのは、1年生の時に姉がシンガポールに連れて行ってくれ、そこで英語が全く通じずショックを受けたから。3年次から所属するゼミに海外研修が多いゼミを選んだが、その前に海外プログラムを体験しておこうと思って本プログラムに参加した。

派遣先では、最初の1週間は英語が通じなくて精神的に落ち込み、ホームシックにかかった。次の週から自分を積極的に出していたところ友人ができ、コミュニケーションが成立するようになっていった。月曜～金曜の毎日9時～13時まで語学学校で英語の授業を受けた。2人の先生が付いてくれて、月曜～水曜が男性教員による語彙と文法の授業、木曜と金曜が女性教員によるスピーキング中心の授業だった。クラスには大阪市立大生が自分以外に1人居た。大阪市立大学の英語授業と違うのは、授業中にグループワークやディスカッション等をする機会が多いこと。教え合うのは自分が理解していないとできないと強く感じた。授業後は、中国、韓国、コロンビアからの留学生と一緒に市内観光に行った。

現地メルボルン大学の学生とのペアリングは、日本語を学ぶ学生が相手となり週1～2回メルボルン大学内を案内してもらったり、どういう教育が行われているかを説明してもらったりした。3回ほど日本語の授業に教える側として参加したり、他の授業を聴講させてもらったりした。メルボルン大学学生の勉学に取り組む姿勢が日本の学生と大きく違うので、刺激を受けた。ペアリング学生とは、自分の関心があることにテーマを決め100語程度で、お互いに会話をした。人によってはしっかりと取り組んでいたが、雑談になる人も居た。自分の場合は部活でもあるサッカーをテーマにして会話をした。この内容を英語でレポートに書き語学学校の先生に提出してフィードバックを受けた。派遣期間の最後に5分間スピーチを行った。自分は環境問題について話した。

ペアリング相手の学生とはその後もSNSで連絡を取り合っており、今度来日するので日本を案内することになっている。

### （3）事前・事後学習について

事前学習では、英語についてはテストを受けることくらいで、個人で準備することになっていた。事後学習は、アンケートに答えた程度。報告会やレポートはなかった。

### （4）成長を感じる点

海外プログラム参加を通じて英語への興味がわき、海外ドラマや映画を字幕に頼らず英

語で鑑賞するようになった。

以前は自分の好きなことだけやるという考え方だったが、参加後は様々なことにチャレンジし、いろいろな人にかかわっていきたいと考えるようになった。実際、日本の人脈も広がっている。

#### (5) 満足・不満足な点

勉強と交流の双方が充実しており、海外の友人がたくさんできたことに満足している。自分の考え方が前向きに変わったことにも満足している。

満足できていないことは、もっと現地の人との出会いができたのではという点と、英語の苦手意識が払拭できなかったこと。

#### (6) 今後の学修

本プログラム参加後、ゼミの3年次ベトナム研修と4年次インドネシア研修に連続して参加した。長期留学にも行ってみたいかったが、就活があるのであきらめた。就職は、このプログラム参加が転機になり、将来の目標を持っているペアリング学生にも刺激されて、海外にモノを売っている企業に決めた。

### 3. 大阪市立大学学生3（商学部商学科4年）

#### (1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

高校までは特になし。大学入学後も具体的に考えていたわけでも、明確なきっかけがあったわけでもない。ただ就職先としてはメーカー（製造業）を何となく視野に入れていた。そうすると、海外体験が気になってくるので、大学生のうちに何か参加してみたいという気持ちはあった。

所属ゼミは海外からの帰国生や留学生も多く、当たり前のように日ごろから英語で話している。もっと自分も話したいと思ったのが研修参加の直接のきっかけになるのかもしれない。英語力に自信がなく、ゼミの中でも英語ができる人たちに引け目や負い目を感じていたので、研修プログラムの告知を見て、自分からゼミの先生に詳しい話を聞きたいとお願いした。ゼミ紹介の段階で、3年次後期と4年次後期にアジア各国で実施されるプロジェクト研修に参加する人が多いということも知っていたので、それまでに何とか語学力を高めたという思いもあった。またゼミの同期が本プログラムに参加したことも、参加を決めた理由の一つである。。

#### (2) 参加した海外プログラム

基本的なスケジュールとして、午前は語学学校、午後は自由なので語学学校の仲間たちとカフェに行ったりご飯を一緒に食べたりした。空き時間や休日には少しでも英語を使う機

会を増やすことを目指し、積極的に日本人以外の友達と外出するなどして、とにかく語学力向上に努めた。

メルボルン大学では同大学の学生と一緒にビジネス課題解決の授業を受け、交流することができた。その点が、本プログラムと一般的な語学研修との異なる点だと思う。

<関連/現地企業活性化プロジェクト研修>

3年次後期：ベトナム研修（9日間）

4年次後期：インドネシア研修（9日間）

### （3）事前・事後学習について

ビジネス英語力測定テスト「VERSANT」を事前・事後に受検した。事後のスコアは伸びていたもので、データ面からも研修目的の英語力向上を実感できた。その他の事前学習はとくになかったと思う。事後学習としては、「VERSANT」に加え、レポート作成や報告会があった。

### （4）成長を感じる点

プログラムに参加する以前よりも、英語を使うことに対する恥ずかしさのようなものが軽減されたと感じる。またヒアリング、とくにスッと自然に聞き取る力が伸びたと感じる。

（英語の習い始めをレベル1と仮定して）参加前がレベル30とすると、メルボルンのプログラム終了時にはレベル40ぐらいに大きく伸びた感覚があった。直後に行ったベトナム研修は同じレベルを維持していたが、一年空いた4年次のインドネシア研修ではちょっと落ちてレベル38ぐらいの感覚。9日間であれこれやっている間にちょっと感覚が戻ってレベル39、という感じの推移かなと思う。一度伸びているのでガタガタというわけではないし、落ちるといってもレベル30に戻るわけじゃない。ちょっと使えば戻る。就職後に、仕事で英語を日々使うようになると、メルボルン研修時よりもう一段階ベースが上がるのかなと思う。

研修に参加した後の変化としては、英語力に妙な引け目を感じるものがなくなった。メーカーにおける海外にかかわる仕事を現実的な選択肢としてイメージできるようになったので、就職活動にも影響があったと思う。

内面の変化としては、いい意味で図々しくなった。以前は、英語力がないとか恥ずかしいといった気持ちにとらわれていたが、メルボルン研修に行ってみて、それなりに声を出せばいいんだとか、正確な文法じゃなくてもいいのだということが分かった。メルボルンでの語学のテストでも筆記は日本人がよくできて、他の国の人たちは結構ダメ。けれども話をしてみると、日本人はダメで、他の国の人たちは言いたいことをどんどん言っていく。ぼくらに英語力がないのではなくて、「しゃべれる感を出す」みたいな強い気持ちの部分で押し出していくところが弱いのだとわかった。英語を使う際には、文法を気にせず言いたいことをしっかり言うようにしている。



#### (5) 満足・不満足な点

単なる語学研修ではなくて、メルボルン大学の学生とビジネス課題と一緒に取り組めるところに満足している。一方で費用は40～50万円かかるので、奨学金がなかったら申し込む気にはならなかったと思う。奨学金をもらえるということで、参加費用を出してもらった親への負い目のようなものも多少軽くなった。JASSOや同窓会など各種奨学金が出る研修なので、後輩に勧めやすい。

また、メルボルン研修には単位認定がある点で商学部カリキュラムと結びついているかもしれないが、ほかに明確な何かカリキュラムとのつながりを感じることはなかった。

参加してみて感じることは、もっと早い時期、たとえば1年とか2年のうちに自分からアンテナを張って研修プログラムに行っておけばよかったと思った。それならもっと長期のプログラム、たとえば半年ぐらいのプログラムに参加できたかもしれない。より長いプログラムに参加したなら、より力がついたかもしれないと思う。とはいえ、1～2年生の頃にも研修プログラムの告知はおそらく出ていたのに、自分は気づかず興味をもたなかったわけで、どうすれば早い時期から参加しようという気持ちになるのかはわからない。

#### (6) 今後の学修

海外取引や海外勤務のあるメーカー（製造業）に就職予定。仕事の現場で使っていくことになる。